



SDGs から考える未来

～地球や人にやさしい暮らし方～

講師 木築基弘先生

ひょうご出前

環境教室



2月4日、ひょうご出前環境教室が開かれた。この教室ではまず木築基弘先生の地球温暖化についての講演を聞いた。



今、世界では地球温暖化によるさまざまな影響がすでに現れている。例えば、南アジアの国パキスタンでは2022年の梅雨の時期に2日で半年分の雨が降り、国土の3分の1が水に浸かった。他にはオーストラリアで大規模な森林火災が起こり、広範囲にわたる土地や移住地が消失し、野生動物の焼死と生態系が変化した。また、グリーンランドでは北極圏の気温上昇を受け、たくさんの氷が溶け、溶けたことで未知のウイルスがでてきた。

このように地球温暖化が進んでいる今、世界全体で脱炭素社会を目指す必要がある。脱炭素社会とは地球温暖化の原因となる温室効果ガスの排出量「実質ゼロ」を目指す社会のことだ。

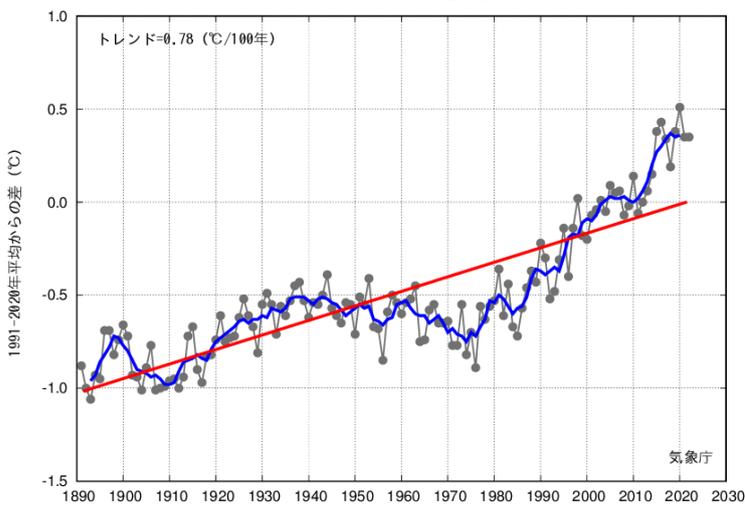
しかし、私たち人間は自動車、エアコン、テレビ、冷蔵庫などたくさんさんの電化製品を使い、温室効果ガスを出している。また、人間活動に

よる温室効果ガスの増加が理由で地球の平均気温は14度から15度が変わった。

このように温室効果ガスは地球に悪い影響をもたらすことは皆さんご存知だと思うが、温室効果ガスは地球を暖める力を持つため、適度な気温を保つ働きもある。もし温室効果ガスがなくなると-17℃になるといわれている。そして、温室効果ガスのひとつの二酸化炭素。ファッション産業での二酸化炭素排出量は約970万トンだ。航空業界より多い。しかし、服に困っている国はなく、買われる服の約2倍つくられ、ブラジルでは服の埋め立てもされている。

そのように生産の全ての工程で二酸化炭素を無駄にしないなら、LCA (Life Cycle Assessment) という言葉がある。意味は製品や

北半球の年平均気温偏差



気象庁HP 北半球 世界の年平均気温差

賢明人語

3月16日、東京で日韓首脳会談が行われた。▼現在の日韓関係は良いとは言いがたい。日韓が抱える問題としてまず思い浮かぶのは竹島の領土問題だ。竹島は島根県に属するが1952年から韓国が領有を主張している。

▼最近では徴用工問題が取り上げられている。2018年に韓国の大法院(最高裁)が、戦時中の元徴用工への賠償を日本企業に命じた判決をめぐる問題だ。解決済とする日本政府と韓国国内世論とに認識の違いが生じ、関係悪化を招いた。▼日韓首脳会談ではこの徴用工問題の解決策について話し合われた。韓国政府が日本企業が命じられた賠償分を韓国の財団が肩代わりする「解決策」を、日本政府は歴代内閣などが示してきた植民地支配への「反省とおわび」の継承を表明した。関係改善へ向け前進しようである。▼しかし、若者の間では韓国と友好関係にある。TWICE や BTS・TREASURE などのグループは日本でとても人気がある。私はアイドルグループにあまり詳しくないが、交流会で知り合った韓国人の友達とDMをしている。もちろん日韓関係がどうという話はしないし、お互いぎくしゃくした感じもない。日本人の友達と同じように旅行に行ったことや料理を作ったことなどを楽しく喋る。▼もちろん歴史の授業で韓国併合などについては学習したが、私は韓国の友達と話していて、関係を妨げる問題があることを意識していなかった。今回のニュースで竹島の領土問題だけではなく、他にも重大な問題が両国間にあることを知った。▼韓国の大統領が寄り添おうとしているので、この機会を逃さず、日本も韓国に対してフラットな気持ちを持ち、両国の友好関係を築いてほしい。私たちが異文化交流を盛んに行うことでこれからの日韓関係はもっと強いものとなる。やはり今後の日韓関係を握るのは私たち若い世代であると強く思う。(峯 明里)

サービスに必要な原料の採取から、製品が使用され、廃棄されるまでのすべての工程での環境負荷を定量的に表そう、という考え方だ。

例えば、車は製造時に大量の二酸化炭素を排出する。日本自動車工業会がまとめた「日本の自動車工業2020年版」によると、2020年度に自動車製造工程で排出した二酸化炭素(CO₂)の排出量は520万トナだった。オーストラリアでは「気候変動チケット」が、2021年10月に始動された。このチケットは国内すべての公共交通機関で使える国民に自動車から公共交通機関への利用転換を進める年間チケットだ。オーストラリアは2040年までに、カーボンニュートラルを達成するという目標を掲げている。カーボンニュートラルとは温室効果ガスの排出量と吸収量を均衡させることだ。実際、鉄道における乗客一人あたりのエネルギー消費量は、電気自動車の5%で済むといわれている。

講演の後、近大豊岡高校の生徒が考えたゲームをした。楽しみながらSDGsを解決するための自分ができることをたくさん学べた。この講演会で脱炭素社会やカーボンニュートラルなど今まで聞いたことがなかった言葉を知れた。また、異常気象の具体例がたくさん取り上げられていて、今の世界の現状を改めて噛み締めた。

(峯 明里)

2022年度小学校出張授業

今年度6校で授業。双方ともに良い経験に

今年度、BeLeaders 小学校出張授業班は計6校の小学校へ赴いた。

妻鹿小学校、荒川小学校、別所小学校、城乾小学校、野里小学校、姫路東小学校と、全て姫路市内の公立小学校である。

小学校出張授業班には中学1年生から高校2年生まで所属しており、家庭学習日やテスト後の午後などを活用して出張授業を行った。

小学校授業の内容はSDGsとは何かを説明した後、我々Be Leadersの活動を例に挙げながら小学生でもできることは何かを一緒に考える、というものになっている。クイズを取り入れることで堅



3月9日(木)に東小学校で授業。6年生2クラス、Be Leadersが二手に分かれて授業を行いました。

11月29日の城乾小学校では私たちの授業後、小学5年生がSDGsの調べ学習について発表。プレゼン資料驚き。



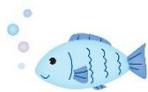
苦しい授業とならないように工夫した。出張授業班の大切にしていることは「楽しむ」こと。原稿は用意してあるが基本的には見ずに自分の言葉で伝える。クイズの時は思いつきリアクションを上げる。どんな意見も取りこぼさずリアクションをとる。私たちの楽しんでいる様子が小学生にも伝われば、最初は固かったクラスの雰囲気も段々やわらかくなり、発言も多くなる。これは全ての小学校に共通していたことである。小学生に授業をする身でありながら、私たち自身小学生から学ぶことが多い。「あそこの道はナイロン袋がよく捨てられている」「ベルマークはこの商品にもついているよ」と小学生から色々な情報を教えてもらった。また想像していた以上に小学生はSDGsについて関心が高い。ゴミ拾いを行ったり、SDGsについての掲示物をしたりと私たちが授業をする前からSDGsについての

活動を行っていた。授業の最初のお決まりの言葉、「SDGsとは何でしょうか?」という「Sustainable Development Goals」と正式名称で答えてくれるのはクラスの1人や2人ではない。そんな意識の高い小学生だからこそ飛び出る質問に驚くことが多かった。「SDGsの1番難しい目標はどれですか?」「服の力プロジェクトではなぜ子供だけ回収するのですか?」「海のゴミではどんなゴミが他にありましたか?」など、想像よりも難しい質問が多かった。1つ1つの質問に答えると同時に、私たちももっと学ばなければならぬと強く感じた。

(菅野柚希)

9月29日初の出張授業にNHKの取材が。緊張したけれどがんばりました。放送はけっこうカット!悲しい。けどいい経験になりました。





「発言」

第2回テーマ

「図書館」



「石橋を叩いて渡る」ということわざがあります。私はこのことわざ通りの性格で、何を始めるにしてもまずは本から入ります。たとえ、あなたが防災に関わる仕事をしなければならぬとしましょう。何から手をつけますか？ 最も効率のいい学び方は、防災に詳しい専門家に教えてもらおうということかもしれません。しかし私は必ず本から入ります。まず防災の入門書からスタートします。次に中学生・高校生向けの新書を数冊、さらに防災に関わる物語や歴史本を文庫で数冊読んでいきます。少し分かった気になったら、一般向けの雑誌や本（特に図解入りの本）を数冊読み進め、最後には背伸びをして専門的な学術書に取り組みます。だからおおよそ十冊ぐらい本を読んでから、やっと私の防災の仕事は始まるわけです。筋金入りの「石橋を叩いて渡る」性格だと自分でも思います。だから、私の場合はものごとに取りかかるのが非常に遅い。あんまりにも石橋を叩きすぎて、「石橋を叩いて壊して、杲然とする」というような体験も、今までに何度かありました。

しかしなんとか仕事が進みだしたら、とにかくおもしろい。あれやこれやと読んできたものを力にして、専門家に質問をしたり、防災に関わる技術を身に付けていたりすることができるようになりました。もちろん、新たな仕事をきちんとこなすためのやり方は、他にも様々なものがあると思います。ただ、私のように人見知りで臆病な性格の人こそ、準備体操の時間をじっくりとかけてもいいのではないのでしょうか。図書館という場所は、こんなふうな、「人を作る」場所なんだと、つくづく思います。【教員・図書館長 石田 宜浩】



私にとって図書館とは某夢の国やNo Limitなテーマパークと同じくらいワクワクする場所だ。私は幼い頃から隙あらば本を読み漁っていたが、実は図書館に行く機会はそう多くなかった。だから、賢明の図書館を見てとても驚いたのを覚えている。というのは、小学校の図書館は冊数があまりなく、読みたい本は人気で常になかったり、そもそも読みたい本が置いていないことがザラだったのだ。だから賢明の図書館の膨大な本の数と圧倒的なジャンルの広さ、そして静かどころか緊張感のあるあの雰囲気私を虜にしたのは言うまでもない。LIBRA に姿を変えた今でも、あの遊園地に行くような特別感を忘れることはない。

文豪、国木田独歩の言葉にこんなものがある。「読書を廃す、これ自殺なり。」
少々過激な言葉ではあるが、的を射ていると私は思う。読書なんて必要ないという声を度々耳にすることがあるが、それは本と、ひいては自分の人生と向き合う気がない故の屁理屈ではないか。読書とは人生を生きるための肥料を得る行為であると思う。人生のヒントは小説や難しい本の中だけでなく、絵本や児童書、図鑑にだって散りばめられている。あとはそれを自分が生かすか殺すかの問題だ。いつか人生に迷いや大きな悩みが生じた時、ふらりと図書館によつてみることをおすすめする。

【H1 R (仮)】

軌道に乗りつつある「発言」。第2回を終え、投稿される内容の深さ、面白さに感動します。そして何よりもテーマに対する熱い思いが感じられるのもこの「発言」のいい所。一つの物事には様々な面があり、人によって捉え方は違います。良い印象、悪い印象、受けた影響、その理由を書き出してみると何かその人のバックボーンが見える気もします。文章にする中で更に考えが深まり、新たな考えも生まれるのでは。

次のテーマは「卒業」。一般的に知られているように海外とは卒業の時期が違います。また形式も雰囲気も違います。惜別の思いと新たな出発への希望、日本の3月はやはり独特の雰囲気があるように感じます。また、何か新しいことを始めるのにもいい季節。卒業したいのは「自堕落な自分」「机の上が整理できない自分」「深夜、誘惑に負けてあと一口に手が伸びる自分」「後回しにする自分」などなど。この新聞で「卒業」を宣言しませんか？大募集です。

～募集要項～ 第3回テーマ「卒業」です。

「発言」



「発言」は400～500字程度。少し多くてもOKです。学年は必須で名前はフルネーム、ペンネーム、愛称でも構いません。原稿用紙でも何か別の紙でも構いません。基本、原稿は返却しませんのでご了承下さい。先生方、職員の方、そして保護者の方も大募集です。第3回のテーマは「卒業」です。あなたの卒業の思い出、卒園、小学校、中学校、その他何かからの卒業、卒業にむけて、何でもOKです。この新聞に掲載します。原稿を提出する人は福山先生、平尾先生、新聞班代表 H2 早田、H1 菅野まで持ってきて下さい。基本、月末にこの新聞を発行します。毎月25日を提出締め切りとします。振るってご応募をお願いします。あなたの「声」が多くの人の目に触れますように。掲載は2023年度号になります。ご了承を。 Be Leaders 新聞班

マスク着用のルール変更

あなたはどうしますか？

3月13日から、マスク着用ルールは、屋内・屋外を問わず、個人の判断に委ねられることになった。厚生労働省のホームページには「本人の意思に反してマスクの着脱を強いることがないよう、個人の主体的な判断が尊重されるよう、ご配慮をお願いします」と記載されている。

今年、中学や高校、大学を卒業する人たちはこの3年間ずっとマスクをつけて過ごしてきた。卒業式ではぜひお互いの笑顔を見ながら参加してほしい、という意見も述べられている。しかしこのようなルールを用いられても『マスクをつけない』という人は少なくない。それは『つけない』という理由として、『私は調べていると、こんな理由が目にとまった。それは『いまさらマスクを外してこんな顔だったんだと思われたくない』というものだ。私も中学は賢明に入り、同じ小学校の子が誰もいなかった。だからクラスメイトや先生方はマスクをしているその顔しか知らなかった。マスクだけだと目だけしか見えぬ「きつとこの子やこの先生はこういう顔だろうな」と憶測でしか考えられなかった。そしてそれが当たり前になるとマスクを外しにくくなった。

しかしマスクを外さなくなると大変なこともある。それは体調管理だ。昨年2月大阪府高槻市の小学校で、体育の授業で走っていた小学5年の男子児童が倒れ、亡くなるという事件があった。彼は授業開始時にマスクを着けていたとみられるが、走っていた時の状態は不明という。市教委などによると、2月18日午前9時ごろ、高槻市立小5年の男子児童が、

グラウンドを5分間走る体育の授業中に倒れた。他の児童から「倒れている」と伝えられた担任教諭が、男子児童に休憩するように声をかけたが、目がうつろだったため、児童を両腕で抱きかかえて保健室へ搬送。この際、児童のあごにマスクがかかっていたという。救急車で病院に運ばれたが、昼過ぎに死亡が確認された。

このようにマスクをつけていると十分な呼吸ができなくなり頭がぼーっとしてしまうことがあるそうだ。またこれから先、夏になるにつれ日焼けをしたくないからとカーディガンを着て登下校する賢明生も増えてくるだろう。しかしマスクをつけているのでさえ体にとってはしんどいことなのだ。ご存じのように地球温暖化の影響もあり、猛暑日が激増している今、その危険性はさらに高まることが予想される。今夏はマスクなしが当たり前となつていくかもしれない。しかし、コロナはなくなった訳ではなく、また春は花粉もひどい。その対策としてのマスクはやはり防止の有効な手段の一つである。

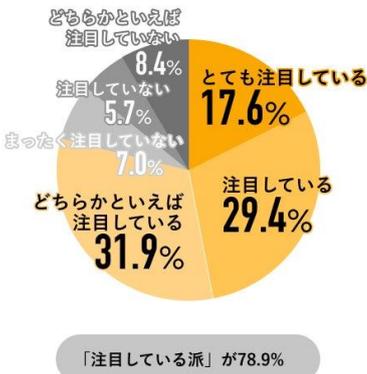
マスクを外すことは悪いことではない。しかし今までつけていたものを外すことには抵抗があるだろう。だから脱マスクの通達が出たからといって無理に外す必要はない。もちろん外したい時は外したい。無理に人に強要せず自分がマスクをしたいならする、したくないなら取る。私はこれが良いと思う。(香山裕莉絵)

どのようなことに注目していますか

注目している派と回答：443人 ※複数回答可

マスク着用の基準	65.5%
医療費の負担	53.3%
ワクチン接種費用の負担	44.5%
行動制限の可否	42.9%
コロナでの医療機関	38.6%
イベント等の定員	26.9%
上位回答	
マスク着用の基準	65.5%
医療費の負担	53.3%
ワクチン接種費用の負担	44.5%

コロナの5類移行の方針について 当てはまるもの 全体集計：561人



PRTIMES ホームページより Job 総研グラフ

女子高生 SDGs サミット 2023 in HIMEJI 3月12日



今回は3月12日に行われた『女子高生 SDGs サミット 2023 in HIMEJI』の運営に携わられた、高校2年生の百原先輩にインタビューをさせていただきました。

1. 女子高生サミットを終えて、何か気づいたことはありますか？

今回は、祭り・伝統文化、家庭・家族、学校生活、美容・ファッション、職業の5つのテーマについて議論しました。私が気付いたことは、そこから生まれた性的差別は「Life（生きる、命、生活）」から生じてきたもので、「スカートは女の子がはくもの」とか、「お茶汲みは女の仕事」のような固定概念は払拭できることなんだと思いました。



2. 話し合いの中で1番印象に残った話題はありますか？

私は祭り伝統文化のグループに参加しましたが、以前からお世話になっている白国神社の三星宮司さんにお話を伺いました。日本は古代より男性が女性を大切な存在にしたことから、男は力仕事、女は家(子)を守る役割となってきたようです。神輿をなぜ女性は担げないのだろうか？というテーマがありました。が、本来は担いではいけないのではなく、「重たいから危険なことをしなくてもいいよ！」という男性の優しさなのに、女性が汚すというふうに、いつしか変わってしまったのだそうです。

また、男性でなければいけないこと、反対に女性でなければいけないことの意味を知り、変えられることは変えていこう！という淳心生の柔軟な意見に明るい未来が見えたような気がしました。

3. 今後やりたい取り組みはありますか？

ジェンダー問題というと、LGBTQのようイメージしている方が多いかもしれませんが、ジェンダーとは「性差」のことで、日々の暮らしに必ずあるものです。しかし、それを男だから、女だから、というカテゴリーで分けるのではなく、その人らしさで考えられるように、今回のサミットのようなイベントを校内でも出来たらいいなと思いました。

ありがとうございました。インタビューを通して、固定概念に縛られるのではなく、その人自身をよく見ることが大切なんだと改めて感じました。この取り組みがどんどん広がっていけば、もっとより良い世界へ進んでいくと思います。

(浮田秀葉・北原萌衣)



2022年度 Be Leaders の活動を

振り返る 柳瀬先生にお話しを伺いました

今年度一年を振り返って Be Leaders 全体で良かった事を教えてください

今年度は活動の内容が濃く、活動を行う幅が校内・校外を問わずに広がって行ったので、生徒みんなが充実して取り組めた一年だったな、というのがまず一つです。

今年の Be Leaders の活動を振り返ってみると沢山のイベント事などに参加するなど、とても忙しかった印象が多かったと思うんですけど、生徒のみんな、それぞれが自分で考え、興味を持ってやってみたい！と参加して、主体的に取り組んでいった姿が印象的だし、良かったです。

グループで話し合ったり、お話を聞きに行ったりする時に、会話する際のコミュニケーション力や自分の考えを発信する力・表現力もついてきました。

今年度は特に学年を問わずに一緒に活動することが多かったですね。先輩から学んだり、そしてその逆もあって先輩が後輩から学んだり。それぞれのタレントを活かし、学年を超えて交流して一緒に活動できました、という事も良かったと思いました。生徒会や奉仕委員会、校内の中の様々な係や委員会とコラボできたのもとても良かったです。

来年度に向けた課題・期待したい事はなんでしょうか？

今年度は生徒・教員共にとにかくとても忙しかった！という印象が強いです。来年度はお互いにサステナブルで持続可能な活動を目指したいです。

具体的にはイベントごとに沢山参加するのではなく、少し選んで参加したり、一定の人に役割が集中しないようにみんなが助け合い、協力し合ったりしていいことと思っています。今年度は活動の幅が広がっているんな活動に参加するようになりました。けれどやっぱり大元の社会・社会問題について知るといふ学びの部分もしっかり調べたり、学びを深める機会を自分たちで企画したり、考えて学びと活動を両立していけるようにして行ってほしいなと思いました。

今年度は教員からのお誘いが多くなってきましたので来年度は皆さん高1高2だけでなく、またこの新聞を読んでくれる中1から中3の生徒の人たちが「本当にやりたい！」「してみたい！」「社会のためになにかしたい！」と思ってるアイデアを発信、提案してくれる事を期待しています。

来年度に挑戦したい事 (Be Leaders・先
生個人的に) はなんですか？

まだまだ同じ学生同士、他校さんとの
繋がりが薄いので学生同士の横の繋が
りを作っていきたいです。

個人的にももっともっと社会のこと
について学びたいので色んな会などに
参加して勉強したり色んな人と出会っ
たりしていきたいなと思っています。

また2月14・15日に東京で行われた
サステナブル・ブランド国際会議2023が
開催され、その中で賢明女子学院が行な
っている活動を柳瀬先生が発表されまし
た。そこで実際に参加された柳瀬先生に
感想をお聞きしました。



(サステナブル・ブランド国際会議とは：
日本での第7回目の開催を迎えるサステナ
ブル・ブランド国際会議東京・丸の内は、こ
れからサステナビリティの取り組みを始めよう
とする方や長年にわたってリーダーとして活
躍してきた方、サステナビリティやブランド、
イノベーション／R&Dのリーダーなどあら
ゆる立場の人が共に参加する、学びとネット
ワーキングのためのコミュニティです。

ほかの団体さんで印象に残ったところはどの
ような所ですか？

印象に残った事は二つで、この会議では高
校生も参加していてSDGsについて調べた
事を論文にし、発表していました。まずそれ
がすごく印象に残りました。

大企業から町の小さな工場まで、利益を求
めるだけの企業でなく、環境や世界の為に企
業として持ち味を活かし、色々な工夫をされ
ておられた事もすごく印象に残っています。
今の世の中は、環境などに関して工夫を施
す事が良しとされていて、とてもいい流れだ
と思ひ感動しました。会議の中で教育はとて
も大事でBe Leadersや賢明での活動は色ん
な方々から評価して頂けたそうです。

私は今年度の最初の号でも柳瀬先生にイ
ンタビューをさせていただきました。今年度
はどうなるんだろうと思ひていましたが、一
号が発刊された時には想像もできなかった
ほど活動の幅が広が
り校内外を問わず沢山の
人と繋がることができ
ました。楽しいだけで
なく、忙しくなる事も
ありましたが全部いい
勉強や思い出になりま
した。Be Leaders への
活動はある意味青春だ
など私は思います。
この新聞を読んでいるみなさん！来年度は
何か活動してみませんか？



野里街道

クリーン大作戦

に参加してきました

3月12日の日曜日に野里街道で野里
小学校の児童や町の方々と清掃ウォー
キングに行ってきました。この清掃ウォー
キングは以前、小学校出張授業に訪れた
際に、何か自分たちにもできることはあ
りませんか？の質問に対して、野里小学
校の小学5年生が提案、企画し、実現した
ものです。多くの小学生が参加し、やる
気に満ち溢れた様子が本当に印象的。

また、3月8日に野里街道では「町
家の日」というイベントも開催されまし
た。この清掃企画はそれに合わせたもの
です。この町家の日は京家屋オーナー
とともに京町家を公共空間として再生
し、次の世代に受け継いでいく取り組み
の一環で、全国各地(京都、姫路、金沢、
大津)で毎年開催されているイベントで
す。姫路は歴史的な町家が数多く残る地
であり、このイベントでは普段は公開さ
れていない部分も公開され、賑わってい
ました。ちなみになぜ3月8日なのだろう
と感じた方もいらっしやるでしょう。そ
のわけはMarch(マーチ)3月+8(や)日
です。

今回は先生2名、高校2年生、高校1
年生、中学3年生、2年生各1名が参加
しました。そして賢明生も町家の中を見

学させていただき、様々な発見を得るこ
とができました。町家の中は天井の高い
平家の一戸建てで涼しい造り、和風の
中庭や神様に感謝する際に使われる太鼓
など、昔ながらの懐かしい日本らしいもの
が沢山ありました。町の方に詳しく説明
していただき、色々なことも知ることが
できました。例えば昔は間口の広さに応
じて年貢が課されたので、町家は間口が
狭く、奥に広がる構造になっているそう
です。新しく建てられた家もその構造に
なっているのが面白かったです。

野里の小学生や町の方々の町への強
い情熱を感じることができた今、私たち
もSDGs11番「住み続けられるまちづく
りを」に繋がる活動にどんどん協力して
いきたいです。
(神足佳音)



2022 年度最終号

ご愛読ありがとうございました



2022 年度代表

早田 美空 (H2)

天声人語・アフリカ大陸、チャリティーについて考えるなどを担当。鋭い意見、広い視野からの記事に定評がある。

今年も様々な社会問題やSDGsに関する記事が書かれたこの Be Leaders 新聞。昨年よりもさらに進化したと自負している。新聞班の記者たちは実際に取材に行ったり、資料を参考にしたり、Be Leaders の活動に参加したりして記事を書き上げている。私はこの新聞がたくさんの方達にとっての考える場所になってほしいと願っている。普段、社会問題やSDGsについて深く考える機会はそう多くはないと思う。だからこそ、月に1度のこの新聞に書かれている賢明生の活動や意見を通して、自分の意見を考える機会にしてほしいのだ。

新聞班は他の Be Leaders 班と比べると決して目立つ活動ができるわけではない。が、班のメンバーは精鋭揃いだ。一人ひとりが自分の意見を持ち、積極的に発言・実行ができています。そんな班員ばかりに囲まれ、この1年間私は楽しく記事を書き続けられた。より良い記事を追及する、妥協せずにこだわり、新聞を発行し続けることができた。班員たちと切磋琢磨した、そしてその支えがあつてのことだ。そんな精鋭たち、来年度もやってくれるだろう。今後の新聞班の記事は見逃さない。

この新聞が少しでも読者の方々のためになり、日常の一部になっていくのなら、これほど記者冥利に尽きることはない。今後も新聞班の活躍にも乞うご期待を。(早田美空)

本紙記者より一言

- 菅野 柚希【デスク】(H1) 思い出深いのは加西市の取り組みについて記事を書くために市役所を訪ねたこと。自分の市について知らないことだらけで驚きの連続でした。
- 藤原 萌衣 (H1) 自分も知らなかった内容を、読んでくださる人にわかりやすい記事にすることに試行錯誤。難しかったけどすごく楽しかったです。
- 神足 佳音 (M3) 自分と世間の意見がことなっていたらどうしよう、などと不安もありましたが、それも含めて成長できたと思います。やっぱり新聞班は楽しいと思える一年でした。
- 峯 明里 (M3) 私たちの記事をきっかけに、1人でも多くの人が環境問題について関心を持ってもらえていたらうれしいです。
- 香山裕莉絵 (M3) 初めは班の人たちと一緒に先生インタビューをさせていただき、文字起こし担当で大変でした。が、この前初めて自分1人で書いた記事が一面を飾ることができたのがとてもうれしかったです。今までは自分だけで書くのが不安でやってこなかったのですが、これからは自分少しずつ自分で書く機会を増やしていきたいです。
- 浮田 秀葉 (M3) 私は、先生にインタビューすることが多く、いろいろな意見を聞けてとても勉強になりました。ありがとうございました。
- 升木 真央 (M3) 今年から新聞班に入って、主にインタビューを担当しました。文章を書くことがとても楽しかったです。来年度も絶対新聞班に入ろうと思います。
- 北原 萌衣 (M3) 自分が知らなかった事を新聞班の仕事を通じて知ることが出来、どんどん自分の視野が広がる感覚があり楽しかったです。
- 宇佐美乃々佳 (M1) 新聞班に入って、友達や先輩と記事が書けて楽しかったです。文章を書く練習にもなってとても良い体験ができたとおもいます。記事を読んでもくれた友達が感想を言ってくれて、新聞班に入ってよかった、楽しいと思えました。短い期間ですが、ありがとうございました。
- 大谷菜々美 (M1) 今年一年 Be Leaders で新聞班として先輩や友達と活動してとても楽しかったです。また、クラスの人たちに読んでもらった時、とても達成感がありました。今年1年間ありがとうございました。
- 沼田 華奈 (M1) 今年 Be Leaders に入って先輩たちに沢山の刺激を受けたので、次自分が先輩になった時、同じように後輩に刺激を与えられるようにこれからも新聞を通してたくさんのことは発信できたらいいと思っています。

記者達の記事も変わってきました。新聞とはどのような役割か。何を伝えるべきか。内容にこだわり抜き、質の高い内容を目指した1年間でした。新聞という何か堅苦しいもの、難しい文章を書かなくてはならないなどの先入観があり、新聞班を希望するのは二の足を踏んでしまうかもしれません。でもそうではありません。自由に書く中で必ず書くべきことが見えてきます。自分の意見・考えを記事に織り込むことで視野が広がり、新たな発見もあります。来年度、Be Leaders 新聞班へ是非。